

『念仏三昧宝王論』の撰述年代について

加藤弘孝

はじめに

一 先行研究

唐代中期の飛錫(生没年不詳)が著した『念仏三昧宝王論』(通称『宝王論』)からは、浄土教、三階教、天台宗、禪宗などの諸思想が重層的に絡み合う特異な思想を見てとることができ、現段階で飛錫が主題とした思想、教学は、完全に解明されてはおらず、先だって『宝王論』に見られる諸思想が互いにどのような意図をもって関連付けられたか考察する必要がある。その際、同時代の諸宗及び思想家達の動向を窺うことが最も重要になってくる訳であるが、『宝王論』の撰述年代はおろか、飛錫の活動年代に関しても、未だに定説を見ないのが現状である。そこで本稿では『宝王論』の撰述年代及び、それに派生する飛錫の行状に関する問題を併せて考察していく。

『宝王論』の撰述年代について言及しているのは、次の諸氏の論考である。以下にその主張するところを列挙する。矢吹慶輝は『宝王論』に三階教の影響がみられることから、開元十三年(七二五)の三階教禁遏より大暦年間(七六六―七七九)の同教復興に至る期間とする(『三階教之研究』一〇五頁)。塚本善隆は飛錫の活動年代を、三階教の復興期と重なる大暦年間、貞元年間(七八五―八〇五)まで認め、撰述時期については再び草堂寺に入った晩年だと推定する(『唐中期の浄土教―特に法照禪師の研究』二九九―三〇八頁)。佐藤哲英は長安千福寺で法華三昧を始めた天宝三年(七四四)より三十年を経た大暦九年(七七四)前後の著作だと見なしている(『天台大師の研究―智顛の著作に関する基礎的研究』六三七頁)。中山正晃は大暦十三年(七七八)以後、再び草堂寺に入り、伝道生活を送っていた晩年に撰述されたものと述べている。

また同時に法照(生没年不詳)の五会念仏の影響を指摘する(『印度学仏教学研究』十七―二、三―三頁)。藤堂恭俊は佐藤哲英の説を受けて、大暦九年(七七四)以後、草堂寺において撰述されたと述べている(『浄土宗全書』六、三―十一頁)。唐中期仏教思想研究会は唐代中期、恐らく七五〇年前後に、撰述された典籍だとする(『大正大学総合佛教研究所年報』二三、七二頁)。伊吹敦は飛錫の生没年代を大よそ七一〇―七八〇年ごろと推定し、安史の乱(七五五―七六三)以降、中国各地に広く展開した人間中心の思想潮流を、復興期の三階教徒や馬祖道一(七〇九―七八八)らと共に飛錫が共有し、それを『宝王論』に反映させていたことを主張する(『東洋学研究』四一、一三六―一四〇頁)。

これらの論考は、『宝王論』本文中に出る同時代に比定し得る思想や『宝王論』「序文」の記述、また飛錫の行状などを典拠としている。何れも唐代中期の著述とする点では共通しているが、導き出された成立年代は、天宝年間(七四二―七五六)から貞元年間までと幅広く一様ではない。これは飛錫の行状そのものが、明確に理解されていないところに起因していると考えられる。よって飛錫の行状を先ず確認した上で、『宝王論』の撰述年代について考察していきたいと思う。

二 飛錫の行状

飛錫は天宝年間の初め(七四二―)、長安に至り、草堂寺に留まったという(『宋高僧伝』三)。天宝三年(七四四)、楚金(六九八―七五八)が千福寺に法華道場を設置すると、四十九人の同行大徳の一人に選ばれて、共に法華三昧を行じた(『千福寺多宝塔碑』)。安史の乱が収束した翌年の広徳二年(七六四)、不空(七〇五―七七四)の推挙により、律儀が中絶していた大興善寺の臨壇大徳の一人になる(『請置大興善寺大徳四十九員』)。同年、不空が大興善寺において、『仏頂尊勝陀羅尼念誦儀軌法』一卷二十紙を訳出するに当たっては、筆受の役目を務めた(『一切経音義』三十五)。永泰元年(七六五)、不空が大明宮内道場において、『仁王護国経』二巻及び『大乘密厳経』三巻を訳出した際には、証義の役目を務めたとされる(『請再訳仁王経制書』、『大唐新翻密厳経序』、『統開元録』上、『貞元録』十五)。また大暦四年(七六九)の内道場における『大集大虚空蔵菩薩所問経』八巻及び『大虚空蔵菩薩念誦法』一卷五紙の訳出時にも証義として関わった(『貞元録』十六)。大暦九年(七七四)六月、不空が没すると、その翌月には『大広智三蔵和上之碑』を著して不空の遺徳を偲んでいる。このころ千福安国両寺の法華道場を検校していたことがその撰号からわかる。また同時期に『不空三蔵和上影賛』を撰述した(『不

空三藏表制集』四)。この書の撰号に「灌頂弟子紫閣山草堂寺
苾芻飛錫撰」とあることから、両寺の法華道場では、不空の
手による『法華儀軌』一卷が用いられていた可能性がある。
大暦十年(七七五)、『如願律師墓誌銘』(『全唐文』九一六所収)
を撰述した。現存しないが、千福寺の慧忠(七七五)のた
めにも碑文を制作したという(『宋高僧伝』九)。大暦十二年
(七七七)八月、止雨祈願の法要を営み、九月には『賀晴表』
を上表している。代宗(七二六―七七九)の下した返答の書に
よって、飛錫が仏門の領袖として久しく道場にあつたことが
わかる(『不空三藏表制集』五)。大暦十三年(七七八)から建
中元年(七八〇)にかけて、臨壇大徳十四人により進められ
た『勅僉定四分律疏』十巻撰述に関連して、興唐温国両寺の
浄土院において転経礼懺六時行道の法要が営まれた。この際、
飛錫は温国寺の臨壇大徳として道場検校の役目に就き、大暦
十四年(七七九)二月に、『謝恩表』(擬題)を上表し勅答を
受けている(『続開元録』中)。なお塚本善隆は、この法要に
おいて『集諸経礼懺儀』巻下所収の『六時礼讚偈』が用いら
れていたと推測している(『前掲書』一八七頁)。

また鑑真(六八八―七六三)と共に来日した思託(生没年不詳)
が、延暦七年(七八八)に撰した『延暦僧録』巻五には、内
道場において遣唐使の訪問を受けた飛錫が、石上宅嗣(七二九
―七八一)の『三藏讚頌』に感嘆し、『念仏五更讚』一卷を撰

『念仏三昧宝王論』の撰述年代について(加藤)

述して、一行に附したことが述べられている。これについて
王勇は「飛錫は唐内道場の僧侶たちの首領らしい存在である
ので、これは時期は不空の円寂(七七四)以後であることを
示唆している。大暦十二年(七七七)、第十六回遣唐使が入唐
しており、『三藏讚頌』はこの時に送唐された可能性はかな
り大きい」(『中日文化交流史大系九 典籍』二〇四頁)と述べ、
時期を特定している。石上宅嗣は天平宝字五年(七六一)、遣
唐副使に任命されたが、その後解任され、この第十四回遣唐
使自体も中止となつている(『続日本紀』二十四)。次に遣唐使
の派遣が成立したのは、王勇の指摘する宝龜八年(七七七)
の第十六回遣唐使である。しかし石上宅嗣存命中の宝龜十年
(七七九)にも第十七回遣唐使(送唐客使)が派遣されている
ため(『続日本紀』三十五)、時期を特定することは難しい。何
れにしても大暦年間末(七七九)までに念仏に関する思想
が確立していたことは確実である。

貞元二十一年(八〇五)、『千福寺多宝塔碑』の背面に飛錫
撰の『千福寺楚金禪師碑』が陰碑として刻入された。ただこ
れはあくまでも摸刻年代であり、また本文中に貞元十三年
(七七七)、楚金(諡号された大円禪師号について言及がない
ことから、本文自体の成立は貞元十三年(七七七)以前、
楚金入寂後まもなくのことであつたと考えられよう。この摸
刻年代をもって、飛錫の活動年代を貞元年間までと認めるこ

とはできず、生存が確認できる下限年代は、『謝恩表』を上表し勅答を受けた大暦十四年（七七九）二月に止めるべきである。

三 『宝王論』の撰述年代

飛錫の行状を確認してみると天台宗、律儀、密教、浄土教など多岐に亘っていることがわかる。中でも不空の訳経場における翻訳活動が目を引き、不空に見出されることによって、飛錫の活動の方向性は決定づけられたと言える。そして飛錫の手による史料の大多数が、大暦九年（七七四）の不空入寂日から大暦十四年（七七九）に至る期間に成立していることは特筆すべきである。『宝王論』もまたこの期間に撰述されたと考えられるのである。『宝王論』「序文」には、「吾拱黙九峯、與世異宮。天書曲臨、自紫閣山草堂寺、令典千福法華勝場、向三十年矣」（「嘉興藏版」一丁右）とあり、天書すなわち勅書により草堂寺より千福寺に止住してから大よそ三十年という時に当たったことが述べられている。千福寺に止住した年次については、『千福寺多宝塔碑』に「自〔天宝〕三載春秋二時、集同行大徳四十九人、行法華三昧、尋奉恩旨、許為恒式。（中略）同行禪師抱玉飛錫」とあるので、天宝三年（七四四）に皇帝へ恩旨を奉じて千福寺に止住したことがわかる。すなわち三十年という年が、飛錫が千福寺に入寺した天

宝三年（七四四）を指していることは明白である。そしてその三十年後は、奇しくも不空の没年の大暦九年（七七四）と一致する。『宝王論』は、不空の入寂を契機に、活動の軸を訳経活動から本格的な執筆活動へと移行させた時期、すなわち思想家としての飛錫の円熟期であった大暦九年（七七四）から大暦十四年（七七九）の間に撰述されたと想定できよう。

おわりに

以上、『宝王論』の撰述年代を想定してみた。大暦九年（七七四）から大暦十四年（七七九）に想定することにより、『宝王論』の持つ多層的な思想的特徴に対して、一つの仮説を提唱することができる。それは長引く戦乱により、地方に個別化、分散化した仏教思想を統合しようとする働きが中央の仏教界の動向としてあり、その潮流を不空の入寂後、仏教界の領袖の一人となった飛錫が反映させて撰述したのが『宝王論』だったというものである。この仮説については、紙面の都合上、別稿において詳しく考察したいと思う。

〈キーワード〉 飛錫、不空、『念仏三昧宝王論』、安史の乱

（佛教学大学院）